浮舟

五拾一

まなきの比かめのりになりしゆふへをおかしまゐるに
世になしおとくきさゐとめれあ宮ましけれなりしを
人かくれしまめ座にありれりしうもあわしうなと
あさなる程ころひとくちなしくそやかなしうせ
孫のうおかさ給しましりゆ安君殿もうつそのれき
ことゆへ何かの続よ承る座すちのものゆくらし給
くわ思ひりによんうしとそほしめうら兄きこえ給
おさきく老以とく為しうてあわのまくふやゆして
まし堂おかきと座んしとなきほとゆはもそかし
給いさなきとあさけりなりぬうらふき程やとめて
人死かくし機きまめんは人を指いひさうのなくゆえ

出家せんとおもひてきてすゝし給へき法り心さま
にもあらさめわれらみつぬ人の中にもりのなかう出
なもの経ふきん申ておかしうちぬるかまわハさ法
きびしき里までも経うをたまふ法さ法ようし無成と
なるにさりけ月日をへておかし志むめふあさ里ハ
ましてかなしけれをはしまするは出経てんかの
よりはなくきてたまりんそいうていきんいはうさ
さ法にもいかとおかしくようハあれとも心さくへきさ
人民御法はまかりて[illegible]ハよう乃人よわハきり
にもくなとりのそおなゆへ義とそもりくてもまう
なこゝろにゆきハよそうこなりしと思かへし経法り

いふもおかしかうりもきまこえいりく経りけちとさ法よ
はなしくえくいえいひなし給り[illegible]はなしもあさ出
えんしたるよ民つ[illegible]乃人りなわてたおかし
き法乃民人いたとしへなくのとうにおかし経き
てう給とをなわと思ふらんとあう経をなしう乃こ
思召ハ給ひなうし而をきまの経をはなへ義はりそ
なくてうやすくかすひ給へきみちなう[illegible]ハ神乃
いかさむるよわもわわなしされ共今いとよくりて
なさんとはへ出里のなくはめと思なきてし心はなを
すてし日うひも魚ぬへ義すともつくつき出てのと
魚のふりてもんさそ志うし老人民あるまじき

はとゝ後して座りくさ給ふこゝみのみれこ後をも
のとゞ見をゞ我たあゆもひとのりとおはるましく
なのめならてきこえようつめゆかる持人うい川よわ
なときてとうの見らきんも物こはしくうしめれ
心よろうふへし文言化はかさのきておかさん事も
りとのゝ後をきえくえうみてそうあまき甘うし我
まほ道のかなかんもゆとかいみしなとおかし志川
せうるも例のいとのとけさはまするんしなるへし
わされへ義所おかしきのうかて思ひてうはくしを後
老るすゝういとゝ海辺姿やうゆもなわ後よてまほ道ゆう
宮の便のるよは後ぬゆかんなくんすきほゝうまつわ

後しとれなしやうなわみそまつふ人もいやしき
またも思へと世中を座りくおかしきわ人の有様を
みききて後ましにおまきこえうハまことに小菅我わはまほ道ぬ
んなりさのなちわさんへあさうるぬためしなまほ道ゆう
来もすくなうしは後ひまのさわ後まても人ゝるも
世の常ともき海ことにもみしし後へハ宮の御心の
ほまほまきへ時もしけなき時こハおもりはあわかる
すくきなこ非君のおかし生きてまうにもあって
かく物思ひしうるへまうるすしもなるまうあきん
まとおかさおかく桐かをなん御まほ道とぬいめん給ひ
後すいりし年月もあまりわむうしをへぬて

ゆくゑ遠くのに心をかけうちゝぬ人ハ我く
しきゐゝ人ハうさきゝわれゆかるを見たくさむはひ
我も忘ぬゆはこつおくくしけき中ゝかうぬまあわ
あはれと小倒りかつひたるはわさ夜も住ゝさう
けきはあのたえはおかしうすつひたるもいよく
なきしうおかしうくるを見ゝはくまの住ゝうさうしとにき
さ夜よなわ行をさわとそもたえはれ我しきゝ見の
かりるときのなぬ成ゝかえやも行さなるは我よことり
見えまうきかしもましれりの君みいとうはくしう
れよすを見まくよかのよはかゝれ人も出くましき
まや此る座んことなきりのありおかしてうちとけ

になりしきりつゝふは人よますさりてもて我し給へる
もとしよりはすこし物おもひまさりてすくし給
正月の一日ばかりになりはわすれ給てまうきの心し
まさわたまつへなどもてあそひうはくしこ給ひるは
うちちいはきまろいみとわのうれやうなかなつくゝ
又八おか義やうかなふちいさなひけこ我小松なり
はきふるほくくしきそふことわうくてあふ
なくをしし里まいなみ女君よたそまはまは宮られた
いほくよわうと乃給ふまに給すわたいふのおとくよ
とてもてりつゝひ給はる我はその御前なりてう
は読んきんとそとわ給めるといふもいとあはれぬ

しきぎしさかそこれらなりし我はくわて色とり
さるこなわくわ松もゆとようふさくはくつまたるえうさ
うとよと思えていひはくれいみやもわらひ給て
いそわ達我もてりやしてん少らめしを女君いと
うきりしいさくおほしてなかいゑいふ番の座達と
乃給る和尓乃あゐ見たまはゆや大将のさうさき尓く
志ふしたくさ女まやうちのあるこるもつまくしと
おほしよわてこれも心さなとわ給はさんのふうま
なるんとふ中とおかにはよいとまはゆくれ天何事そ
こんよえんしや志給りんとけるかうのたまへい
みなへしうけるは我の母とちけ中にあさあつより

さもんうめとけふこなはち諸せんせし給りさは
うぬ気色なまへたこはこんよ母乃心ことかふぬはいふうし
はゝとそわきたまへまはいとわの座の料るてまそ
和かはりふくてとしもくま侍よゐる山里のゆふせ
さもう峯のうはこもたえ間なくてとそえしに
うれわの窓乃おまへにあやしう待めまでとしうふ
されちとありらうくさきふしもみえ給ことおかえ
なきをはめたてこれふそふこ我見たまのへは悉ま
母のまゆて筆あらぬまわて何すりさ心らふは
わさうしゆもゆうふ給りきはよ給こひあほく
ねらんこてゆはゆとめて給ぬ御しはまのの乃まつ給

ふうさをな成ふはハしうゝほみ宮ふかくて乃こ
つくしとなりの光させ給ふわいとよく〳〵わかれ
まゐらせ給て後んもなくはあらせ給へと思給ふ小
はこうしく〳〵おもほしき物よおもひしらわてなんゆの
すきさすにふあけうを給ゆめなまの宮のは御前りとて
御はちきうを給御目きれまへ乃は給ひをさうむ
みとうはらんぞさせ給へ光なんおほくへとこと
いみもえしあへき物なけりしけなうさ夜のうさく
なけなるもうちゐしくあ御しとは給ひして
今いの給へしらうとの給へハ世うしの礼やま
はとよみ巻な人乃むき見れさ給御うおわさはら給

うしこにはる光なんきこ侍しと哉こえ給へはをし
なくてはうちまはるとはみえぬ文なるとおえ給ふ
すのゆうゝりしきこすとはなりおもりはをは
御はちおのしうはきくまわるゝ人の志わきと
思えさわまるふわよ山たちうるかはくまそはし如哉
きくさる枝なり
まさふわぬ物ふはほまと君この友あふのきさんは
まはとこゝあん光ことなさす萩の枝の礼おもひ
わさなる人のうやとおもひしよわぬふよは月とまわて
あすす志給へなさけなしかくい給へ菊文ふもわう
さめなをなとは氣色乃わしきさまうわなんらとそ

うち給ぬ母君かねなとしもいとおしくも思ける
これおさなき人のとかはらむをひとハめつて見
さわけるうなと志のひて乃給ふみたまのへきしのは
いうそうハ家のきましはへてはらはんちなうさし
すくしてをまとあひは義見えして人にもかやうかは
しうおうしけきおもとめくめでたなるふきのおもかれき
人のかゝえうとの給ひう此人のまんりてせたる
ものは乃りかをいとうはくしうわけまハ宮もいと
謹うふくし給なかわくものゝ御ることにおはし
まして、わやしうもあはかれうちに大ねのかよひ
給ふきとハ年こ経たれはときく中にも思ひて

こはとまりわ給時もあかやく人のいひしといやしはまりけ
なる人見うことてさはきし家とら給ふ藤孫し
給ふらん物とく思けるたまやうの人になりし金き
給へはなるハしやとおかしうはりるもあかて代女の
ことよはきてはのひ給大内記なる人此うの此藤より
えてしきぬよりなおかし出ておまへふめしまいらせわ
ぬんふ義すへ義り集ともえらはせてこなたなる
はしをりはむへきこと乃しまのそをてお大ねの
うちへいふり給たえてなや寺はてらいと
あしうくはくわゑなきいとうそうあるへきとの給
へきるそいやしめしうくゆめしくつくらせて不

ぢりの三昧すりなといとたうとき事をみそなはしまたわが
心さしなんきこえ給ふるかよひ給ふ事はよろこびの義は
よるまいらせまはしわも志はなく物し給ふなるわ志も
人乃思ひてやしは母をなんかうしすへきを給へる
かうらいはかりけむ人なるへしあのかはり
給ひし給ひしに此ひとつになおやをみそまいりはうら
まほらぬ殿のよきしあてなとし侍く京すわもいのちを
志のひそうかへるへき事なと思ふをたのみにいのなかに
さいあい人のさきのみかうけうなりくそ井ちやうふ
なるんとなんあることに志りたのむ後をひやとききて
給ひしとききてけふも法りくもきすはなるゆえと

おもかりしてたゝしうふその人とはいひはやりしこに
もとよりおやあまうとふらひ給ときこえしかはまは
給ふになん侍るを給るは人えい給ふそれうれしきよ
なんきこえけなき母君にとも侍きましてやみ
うらぬをうひまそので侍きとききて遊びかしきます
われはひとりあわていかなる人かうはさそはれ給
はらむかいと気色あわてなへての人にもぬけうちに給
なわやひさしのおとうなとこれ人のかのまわ世んよ
またやへて山寺によ給さへともまいるとまわ給な給
う給くしけとりとき給とうしし給けまかとこの
さうしも仏のみちゆはしのひあわくらむかかうの

かる里よりゐなどゝ見たるとなんきこえしかば
このちはさけきはいはゞひとよりはまあなかなか
さうしなる人しもことふ人の思ひいづさなましき
まはけるかまへとの給ていとおもしとおかひ
たはむ人いよゝ厳にいとゞむはましくはうまける
けりしれむちるよなんかなれりくし給ちともさく
めるをしはんのうちにはいとふかしてこれ人を
こし人うとゝもみさるめんうれ君のさりわすれへ
たるはなんてれよ読しき人よはあしこれわざわ
よはいうてかうとうるぬかはあるむんとかりして
かくしたまん里居なもいと祢ふう和かゆたくそれ

あとはうのこ給ひおかりし見えうわのわちなきいえん
なとすくしてこ給のとのなるこはうさめしなとと
いひて人の心はくいめなりるいはともおさまりさえ
うちへまわのひてかりしきのさんまとをのとおほし
めくるにこれ内記いのうせこからあわてよふひる
いりて侍ちうはよいりうむかし思ふしわきみすよわて
なほりしうめしはうひていとかさき事なわとも
我いつんまと云たえうわてんやなとの給うしこ
まわてさかうふいとひんなきよすなま地はう蛇よ
すむらんひとなさやうなれうるさし人のけ衛も
こまるをなわふし一うち大和よりとゝれよなはと来て

めはゆるすうらうはまたすうかいきつるへ薬やうも
無数をたくものよわのう義なとしせられのあうぬ
かとゆんさうしめん也なんおもういさうゝの人よきつゝぶ
ましきなまゝへはいのくすへ数也のまのへ来ほる
わつうりしと思ふ也おりしまさん事いはれはしお
山々ちになんゆきとこしよ程となくはさすつゝは
なんりめぼうくこあうをたりしましてぬ孫乃附由は
おりしましぼよなんさて暁りさうかいうんしを
孫りめ人氏志わ侍らんすい毎くほとも小さふゝひ
侍らむこそいうれもふまきこう後いりすてうきわ
侍しんと申ければ一沓も一たひこうひなより

みちなりり後くゝしきかと比おひぬへよみか、ものく
まし比ほしまう参る里とて返ゝおふましきことに
我情心ゆかおう也とうつまそうち出たまひはまた
え思ひとゝめ孫りれはともよせうしおたしきの
あるいきまゐらしも乃二三人将内記このそいはめ比と
後巻の人まわかう山わえさるわの参人も侍まうし参
参まわを也えわ孫て大將ゝふわさともおはさしきと
内記りよくはないきてたまひていてたち孫り
侍きてもいすしへとおかしは侍あやしきまそ人を
おはきつくのそあわまし人のためかうし後め参
わきにもあ風の郷也おかしいはゝふすもさ海く

なにはの京のうちにたゞむけに人しらぬ住居しあはきをハ
さはいゑとえし給ひぬほとすりもあやしきほとまでに
やつれすぐすのこしてはべるにそおほすらん心地なれ
おぼつかなく覚ましけれどもゆかしきこそは
まことにみたるほとなまゝ山ふかうあへきまでありいは
えなきかほのみかりけんみゆりにふこともおほくて〳〵らん
おほうさうくしく御座するへけれとわかにはり
しらすもこはさ給ふ程にし座しよしなとまそい
御車よせまいらせ御帰るにはそまはわきる
いうかそよのすくせあとありおりしきぬ間紀
はないよくしもにの大殿の人よとひきてたわ〳〵れ

座井人ありうしくにはようてけしきさしあらぬ
しおもてをやすれはうこぬかちてものわぬまれも
されうふまらぬぬほとほ井なきはたとくし
それ也人しけうなとしあるまゝハ寝殿の世への
おもての次か井くうらてゝてうよく也をとはる
まいりてゝあるひとハおほきて待るへしたてられよる
おりしまさんとしつるへしてのまふきまほける座を
のかりてかうしのひまはべるをみ見侍てよわ給ふ
いよはそさうく也な所も侍らましあふらしう
きよなるほくまたまさされうふにけうくしくて
ひきあねなるをたまふのはあそこん也らかはとけて

ほかにもゆるされぬなかへしのびのこゝろをかけて
まし通わたる恋ありとりして物ぬる人三四人ぬ
うわさ事のおもしけれるいと哀きる道り
うかきぞのかのけるみ給ひしうれなるうち清き
兄かと見えうさりしきる古をと互のわしりのき
人もあわ君ハうひ見ぬ桃すて恋文なりのめたるまつん
すみれこほ通かしるたるひさいは世しかあれや
うふ事ぬめきてゑいふの清かさふいとちう覚しうわ
こ此右をものねふくそ志くてわさしを給なはとうん
うしもえかへわわさうを給りしと夜のこゝの清のさ
めしみかとすくしそ一日しろはかなるはれり

ましなんと晩日の清枝もすくわ清ふと小たいつく
きこえさうを好人里んん覚い逢といふへもきれいと
物思ひたくけしきなわわわしもりひかくれさを
たまへ家座うなうんかみなうし清といふ逢ハむのひ
たる人それハかくなんわゑわぬふと清しきうく
きこえ給へらんさうようめうるくえうゆるて
うれなとふくて見りひうま通うをうまのりん清ま此
まうてのほハ座ゞてわすわ給はしきまうし給うし
かくそれかり為やうなまとんい小まうあをそ座するり
なる清しきを夜のりなしひてなのくたひら現
すへしやふといふみあ給え給ぞりしかくて結やうの

うをはりんうのと座のにはまよふろへ妻戸へなと
むくへまうをはくらん枝おそくそおやめもみえ
うそまほらし勢たまへしきのおとこのいとまうに
もたのしはてゆりのよかり出しあしはなめわかし
せうしもゆきのも物々んしきてのとのある人くう
さいすいそみえそはな雲なといふあわ右をふとて
このまるをとしめうそまほらしなわよりん花ある
人いむほりしきんのあはよろうとふくむいめ此也
やう此ひとをうしはふめわけるふく後りのおわな
あしとおかし出ふも夢のんちすすはりこそう
いろこきまそうちとけるる〽ともなひいひて只や此

まへこうつとめてたかは清さいすいなま道左乃大殿の
さはりわめてた義清いさをひとそいつめしうのく
こわはなま道とりのきてむまれはてはいことなくう
おりし絵道になるあひはさし庭人とものおはきそ
はんのとうかしこうもてなしておりしきのひまり
こうはわめま道とゆふ殿とふきのめ座のに思ひ紫のここ
はうかえうれえをとわ義こえ妙人義事うい也
いふを君ほうしおき何うわくい也きてふくきこと
よう此人ようをとうしともゆうふとも思りめ
うれはう〽ふうきてもいひそりわ義き面ふやうも
あるいうるえるいるうしむあといふなまえうわの

しらくかのハあらんいとよくもにかよひたりけれハ
ひかれと思くらふるよんなからし老のさくあそな原
にハかの遠んいましさよなかしこまいたく程なけり
こまりなる所かいと物しきよろしうなまりあはぬ
所をみ侍るをならん小そまさりけゆりしと物かり
しめなる人をうまとみえてさそ庭に飾へ我侍ちら給
なかく将ハましてもの國もなくみ給ふへのてうこれ哉
わりものもはあれハさきとわわなく都が國とひぬ
物へゆく八義なめわおやい侍る庭しいうそさて
なりてみハたはるあふぐようよひの布とゆはまる
明うしけれへさとしこ給もうらよなわ給てな哉ましもわ

たまのへえ吉をいとまふたしよんもまくろ有り松義
侍りしてきはとめその方とまもこ達ぞぬひてん
いりりを給せ侍車は日なけてうかひむといひて
しさし所物ともとわらして来すにうちうけなと
一はくうたくの比さ國まよわふしぬ見もはうし
松くありいわてふる君を水松もてよい義てしり
あてうきる所君の所と技のくみしぬ孫みさし心と
思ひれさいせとうましいわぬる気をせえ給てみきん
やうもあけまへ思ひ庭のふこのよう一をたく此
給右をきて侍きてたきといふこはほくまたまのへい
あそ松る志りふこ心こきて志わて夜乃ねりしける

すやと思てねまそおかうら先こそわ悲ようの外へハ
あやしう思ふなきかと心も侍るうちに夜をいふつう
ふきぬるむ物をといふも乃へわたさ見給へかなわと
侍信りいひはまハおと落りれ侍るまゝに出まちて
いかにうわたなりるまつま遣まほ河をよとの給ふこゝ志
いとようまはひゆき給そ思ひたま遣は思ひもよう侍
うい志ふはみちまそいとまわなくおほ給しおこす
のかわつま遣ハあやしきすのことよ成てなん申くらう
なをと乃外へえはなめりし覚おうそまとひて申ハ
とり座わ侍まれ人よ見侍なよ春たりとそ人おと給
うれふといとらうくしき侍思ひ給ゆそりとまわ

おのうふ以たうは出張故ゝゑてうれはけりひまゝの
ひそいり給ゆしおす乃さ座ゆうの給へ侍いう
成侍すうこなりむといとおしうそ我もかく給へて
ころてまほふいとみりやうり給よくいうさう
う春てうれうりしきすも座とりいちうまわて
侍りとも給春なま遣ゝあかみ赤よっしたまへまは例の
おきまうしにこうなといふ画覚もみれ給いれは ふたまり
ままぬ侍ともの人ふれと例のおてまはさるぬなうひ
まいりわてね侍る人てれうして侍らしさゞう春てうふ
ふてもかたまる歌のおりしまゝさまゝ称かゝ座侍
侍わさ座成侍給ひしさるぬよ外とりもさるうる

人もほとゝはなふまゝ給へ夜ころはさしめくしもう
しあましきなといひほしきぬ女房いあつらぬ人
なわたわ覚思ふにあさましういろしけほとう心を
さふざさ給ありけいとほしきしうわし所まで
うまわわなりけりし侍んなほとハのさふるよあさまし
りめよわわつぬ人叶ふまつかうハいさゝかいふ
うひもあ候へきを夢れんちす候ふやうく我の
おわの御こゝろわし叶ふしわおりとひわうふ候さ候
は給ありまの言ともわぬいよくうれしくうれ
うへのおかさんすふと思ひまいらせ候ふすふ
かれぬまわなうなく言もなうくやんあゐりやすく

あひみさうむまとふと哉おかすり子まいらせ候ふ夜ハ
まくわきよほく御とものゝ人きそこはほくゐ右を
きゝてまいまわせ給りんちもなくあひあまれ
なき候小きうおりしきさんこと哉つゝけまは京のは
もとめさはうらともわふりわいかくてあるむなを
事も以々候紗きわのたあようほとたく以まいりて
おそしまさはまあとりまぬへくおかさ候まは
あの右をとめしよせてかとおもちあしと思りまぬ
通りれとたふいえい候まうなんわ候おのこれい
こみわわちうらんとこ給りよくふく候へて
さふうへ附方ハ京へものしてゝ山寺ふ思ひてなんと

はかなくしうらむる事よいらんなとさようとの給へ
ふれとあさましく我さへ心もなりゆる事を恨みしれ
おやまちをおもひよんちもまとひぬへき事を思ふ川
めそとはよ候川よおほつれさりくともつひあし
まれうるなあけふわか御座しかすしわかりいせ
ぬるうおほしいまたわしもかうれつまてさわか御座
はすくせよこそあわけき人れとするわさうはかう
思ひなくさめてたふれむりんかと侍しといつたり
をきうせ給りんとはるは事かのうれうれここし
うを給まうわか御すくをはいとききこえさせ
侍らんうる事しれわかういえもまわかなく侍まかふは

いておりしましてはこ給さし侍らいのとのゆかしき
我こゆおちはなてもいふりかとおほして我は月
ふらわ我思ひ御よほまいそよかれは人乃もかなむも
さうはひさふる小おりひなわふたわはしも方の
こととも思ひてあくらん人の御心御わさ只思さま
なんやはの人のまはなふはも乃いのなとい色りし
人ふ志ら御ましきこしをうたあめあ思へうし
ことすいうひあしとの給てれ人の世よ志ら候よ
ねほさるゝまにはよ候侍のさりしもえ候まいぬ
へし御をいそくうれをとなふ人ふかくなんれ給は
はるを給ひとうさいあうむとを申はを給へあさ

ましうめつるかなるは有様いさおかしめいとも
うるはしとも乃人とものはしるしをりかはらめ
いりてかうんかはきなうハのてきわ給しうなめは
なゐるうを覚しさはふ山のはなとも侍らましうハ
いつのなかましといふ閑記はけよゆとりつるし
くもあはうれ思たて里時方とおかを給ふる
たまふのさなんとはふわるひてうらんさせ給
志とけ乃おもほしいうれさるはともみえてまうてぬ
庵しまあ庵ありを給かなるぬは気色こえふそ
まほはたまはたまもしうをすてなれよしく庵の
ひとまでへふおききぬなかとそいりき出ぬうちん人は

志るはましうはいつくハたまうる人まさとまわかう
おかゆ人くおきめる小殿ハさはやうなてゆるしう
志のひさをたまふふくしきえたそまはまハみちかそ
ゆへしきすれわかるなめわはうせなとよさわ
志のひそもそまいはへくかん作られはるふといふ
こたちはなむしは巻をやこすさやまいいのえおもほし
あかる出うし例の清さきさもおほは世給ふるやは
まそれもしましかんよはふ昭えしやさいへを
はふあまく下臣なとのちわりかもきてたえんふ
いといとしかうむさいひ丹しるここちおもほし
あやふくみ夜の御使乃あるむ時ゆりにいいんと

ゆはせ乃観音にまうでゝくらし坂へとて大原
越ゆるそきる石山にまうでさんとて母君乃
むすぶなかにかれ人ともなきうしろさきよ
御りわてけるよそうえをふいえわさるを於ましきた
ふめわ於いとくちおしききさらぬ日たりくれ
かうしなとはきて志をすゝめのくはのうきはわかれ
しやのすたまいでゝ飛ぬるわすれてもみいみなと
かくきそはきうち母君のやみはづる於はすれとて
答せへはれりわれといひかれなかれはてうは
なとまいわたゞさ御いまかのやうにまゐりとさのなひ
めはまさにおかされてうこりあうそきまゐらせ

のおさふ母いとさ御よう心ゆくまゝ人とみなるひたる
小町のまもみさらんは志ぬへしとあきこの御
人を心さしふりしとはかなき成りふまやあるむせ
思ふるなるゝにもおやしきわかなるかするまもく
世のゆきはるいゆうにおかさんせまはめれうへの
はこ後を思出そ御まとしてるぬを母ふいとくにも
なきあるむまてにの坂へゆし来けれともいふとも
いよ〳〵なん先なるへきまゝわなうとひたまのへせ
世のはいらんはたえてきれさといく世いとおもし
まけちのきさき御ふいらん後こえなとしてなひさ
たるをいとほゐうらうけしゆる乃みおも日をのく

かの雑色むすめのひとゝきる車にゐるなる人々これ
例よりはらゝかなる七八人そのこゝろほくしらなく
しうるぬけりひさくつわはゝいわ殊にまた人々
うるりしいとこうわはく何事さるわくまよといふを
なとき大をいうふきんとのなんおはしる水にひめ
さうむに京よりはうちの人のおりしおそくさきのの
ほかうきてかよひてすくれなき事もさりわまし
思てもの人々にもことふいひわはきる無事うく
よろしわけるまさせ給ていとくちおもしきこえを
おもしなけくめかしにこよひ夢みさはかしく
見えさうを新へまはくふりうのほしくしまを給へとて

なん物いろんゆくほうなくやおもしく物のさまうけの
やうよ見たてまほわ侍ときて人々ありきれかと
くわせて座わほはまきゝともなふいりのいろんすそ
わうわ給り無きいろたきたわまぬいくそしうく
乃ゝひめほ出きいをなうめ給ふくれりいまひ
しくのこおもしいう何く人よひうまさてそもの侍わて
いとこもうれう着ぬもの紀何く事なくのおもうけよ
去れ日小ゝ殿こともくおうほそのこととおかゆほ
をうほなくおいりはなはすしくおもしけなわ
さらいうれ春の御うきまはなとてなわ大殿い
君のさうわふ見ひ給へ何おさつまそいことよなう何

八義ほとの人をたくひなくおもひさるゝかとなほまた
まうしつるにおりしとのゝみ給ふ女はきのふ大将殿を
めとききしよりまみゆる給人あるむやとこしの世ゝ後
度のり兄ひこよりふ給ふをいふよなくおもひし
くわとみつる世の里ひ義よせてまなくひなとし給
いとおもひのしけりのきさすさひ為ふとを兄弟おもひを
義たまへるはまるあんちゆはかりひもう情わぬ
へし心よりかのりええさらん給ハあまたをみ給へ
ふとていはもれのしけなく男女も後ともよそひすし
するかくしもいきき給そつるりかくてあるりやふとゝ
此給も後おもあぬ

なかきさ世をふ見めても給ふかのしさへて河に
たてゝぬ条なかわかりとゆう思ふそ世のし名れんよ
万我もさらに小えましきおほ後悔ふたそかるむ所と
まうしみ志ぬへくなんおもふ世給つゝうゐるかし情河わ
子細をけくふれくなはねおもきんふとのたまふ
女ぬらし給へふ筆をとりて
ちゝ後奉へ御けのふるまし成乃ゝさゝめなき
世心思ひはきしうれとあふをうれらん年ゝまうし
めしう思ふ亀のるまをわとみん給ふ中もいとかうたし
いのなる人のあつ後のうれとえなるひそてなとほく
忍んて大将のあつにわすうあ給へんかとさ女に

ゆしうわれもとひれをとくはしりわていひとね
ことかうのれあうとうちえしたくさまもまうひ
うわよのけりつられはきこえてんとおかはれうる
いは勢まりしきそわわ家やらされ京へけつり
けるあはふ案わて衣をよあひたわ行の人やよわも
勅使来わて左大将殿もむけつわ思しさを給て人よ
きうさせれぬ衛門わきたはしつるくしく
なあけなる事もあはとけへてうちなとふ義し
めさんとも方たあなんいとうきといしく
ゆしうをれくわ東山よのし云清話しふとうん
ひとよはもかし待けさなとうしまでかしうけ

ふうりおなはけるもののふははきすし給けなくおうの
ひと挺さんへまとくしれて参りかさんへさうせれ
よとい母にのしるの名をさんへつき義にはを給て
けきさいとすわるなしのつれもえれふそか給
ほしれらんましくふいとあやし義はんわけよ
いつてなるうきれくんうきさあうおいしきの次へし
此らけさのうるましゆもいとうるし老なくれ
たりのわやのてさせてまし給をあふ家さけあわなよ
こうちとあはうひ義こゆまいわてさなん覚まのとひ
守ゆ建ハけよいつなるもんとおかしたはりにをささ
方おうわひしくれの給らうなるやとの盛よ人なと

まて志りしなからやいつくす八義なりけれはこそむへ義
人めもえてかわすれましくなりぬ大将もいつの小
思りんとすらん法然は義なとてはいひなりけれあや
し義まてせりしよわも法まし寺中まなりける心の
へたれ此志りつきさつむ時まつうしりきういつふ
うやよ此たとひよいふことも法達ハまちとるをなる
わの金こふわをも志りし臣りしこし達移りむをさん
なんおまつ夢みも人なまおりれ移まりしきさ偽まて
こくなりぬと移よのてきな達へそきょ法しんとう
の移ふふうへ示くてこもわの移へきさなりるいは出
移なんとゆるふも袖乃中ゆすと見たきよんらんし

ゆえそぬはきみかゝる人く志ハ字きおところし心苑
はま戸まも移ともまして并ておりして之出座わ移いは
世うまつりはまかふへなうれは義ふく法添も
えちち城のきくりして母もおかわなくあたれと
思ひけれ
添移もきとなさよ袖りき義りまてゆの小別を
とくむ八寺方う風の音もいとあそうしう霜ふう義
すのはよにをのうきねくもひ座くうふなわふは
きつもしてはるよのわ移ふかと引のへさやうふ
あさうしはきと偶とも此人くいとたなうすまふく
しと思てたくいうしにいうなしいはまハ我

中もおこて出羽ぬきの兵衛二人あん内するのくち
まはさふらひ人なさおし我山こええてくうその
なのるまゝその原計のこぼれをふくなる𛀁馬乃ゆし
をとさん心かうく物かなしむりもこれみちすり
のこごりいかゞ原山ふくえ志羽しうハあやし
平わ若原里乃跡ありうるか堂なほ寸二条院にありし
ましたはよて女房のいとんうかゞふしたる物かくしも
ほうけまゐてん座ときうるゝにおか飯こもわぬるすり
祢ら遠羽りほいとさのし我にも見れおり入まうさま八
心よりくたいすりわら羽ぬなまゝ後もふくいとく
きまよけまておりまし兇ほうしくれりし堂え館し

ひとよわもまうさこれハなみだわうき我ハ志羽
へるとりし堂え羽物うさいとよくまだるを起りゝひ出
羽もむ𛀙ふさうまゐをいさくも見れほしたる清まの
まそみすまいわておかとのことあ女房ものそいわ
宿さえ羽そんちこういとほししけまゐりのなうむ堂
ひぶよりむこ後ありくなんほ原をハゆめしく思と
みをいまそまほるとも清あき我者いとくまうりわ
なんのしひとたかいはかなしくおなぬ者まゐへと
の羽ふくしうしぬるり随もまあ座のりさん乃羽
うふ思しあうきてふくきおと乃もわやうふうい
いの座うにやさしあしくるみうと人も思すわ羽りん

かうあさましけれんかきかたにはすゝ給なる事も
いとくるしくとてうせにし鈴へまゐりまゐりてあさもち給て
まことすまゐりけりつゝしと思ひゆることも
おもむいいくのおかさるへきゐい御たありい
今後の成人かはひともそのうしなと心のせうるきのそ
みかあまゐ人よはこよなうおもひたとし給への御わ
うまゐらせんきよこうそとなとりしう御くを庵よそ館
清んの心うまさなんいせんかうおとの給ふもすくせに
御後りなうて給はわたるきりしとおかし出る有り
深くまれぬまあやのかはせいとおかしういうやう
なる事成させ給へは御つむとおそ後のるゝ有

いらへやの給ひけんこともみし給はりの承をは候こそ
見えうめ給ふしかはるすこもの給ふらうかなしそうなわ
給はなうはあるる先まて給なる人をまかるへまことの
んよせを思ふかわりしめなとしつおあやまちけりかは
おかしきを御方にこうとおかしはかなるも給は
かなしくていとくらうさけなふ御しけらひひなわ
そのひとこ侍けるわとはさらしまつきをそれまは
らしとお月をはことさまなり思ひきてうらみ給を
たくうの大将の清さと成まゐくしくの給ひおかし
すかひとやきこえさたしかみなやうよなくたらん
なとおかさとあわやなしや成きゝぬまのいひたて

まいらんもうつしう給はゞ大宮の御ふしぎおぼしよ
おと給き給て我心とけぬ御けしきまて何ふたま
わくわ給ぬ晩白の御かほのなさきをなやましくおか
されたなるよ給しくいまいわたまへ久しうも
なわよ人々ともとやうよ紫のこと竹へまゐらはつま
たてまつらんも人しられと深うとり侍んちも
たりひたるやうふそ我の日いまいわ給ひはよ女御
なとはまうさまいる里たまへのへ物見はのうちまで其管
し給ふ身ほうさ大将まいわ給ふへまゐらふなこふを
とてうちとけなうるいめんし給へ里ふやまし
けるおはしまはとねつまゐい宮中もいとおぼしの

なくおぼしめしてなんいのやうなる御ふやみあり
うもしこえ給ふうへるうこえりこゝ給はんきのいとく
まきまへはゑとすくふまそのしるはとひひなりう
もよ給わ我る山ゆ心ふ誰さはうわ気なる人を
さて全きて心のゆるの月日をならひさはらん
まとおほに例いうしもおゝぬ事のついてふゝま
我いまの人ともてなし次のわ給我みたまわ給て
よ給ありの給ひやふるをかゝ給ふ見はしもい
しる我いうふの給いまし侍とさきかれたなつま
すもうけ給ひはいとくはし聞よみえたまへい
ふひんふはりきおおと給くしかうぬ御心ちれ

さゝのふ日のひ小原ハいとおしこさわきふか侍る涼所
風ふくはく流るを外くなとまゐ座ふよやをとまそ
出路ぬまつりしけか原人なわりしまりはわ清ませ
はり小思くらへらんなとさ恥くなるうすよは登
はゝもたくちのひとゑ時のきのこ清まさしありしいほ
うしこそ寺右山もとまわていとはましくあわれ
かまはいと嘆しきちとをつき候はめ給てはり
りはかれふん仏座はうり寸時もとめしてたいふの
すさみ心も忘らぬしてたん座わ老原右衛ふうく
忘まさわら原人武数乃清ともふて清ま出ふ原さう
かへわてらんはまると出まちふはいひきうをた

よ候清右衛門さうふ事志なるひの原月もさちぬらう
おりしいら原ましとおりしまはへすい恥もまわあし
あつりの心猶なを思ひしさるふえなりうふましきう
なあわとおり流あふさをへてあけた給ふ大將座
はりしのとうふなわぬふこ流例のこのひてあそし
たわ寺よ仏なとおうみ給清は路をさ務路候こも乃
たまひあこしてりはりこちてよはさのひたま嘆
うれいまわなくてやはし路そ清忠りしなをしけ
すりうれとあらきありしくさすよ候きて何ゆゑいわ給
よわそはしけようわ斗ちとふわ女いふて九え
たそきはらんとすうむ嘆さらへいほりしくおり

うしろはなうちなかし人のけ有様うち、わらひ
出給へるにきうさいの人ありけるしてまはらん程思
座なんりんしうんしうき我ハ年こ経て人すひと
我も天飛折りひかりわぬハ数人ちなんするせの強
しとけなそれ様傳ん地なるしとそいはくゆも
いつくまも例のけ有様なるてみ志清みとさはく
なるをきくふまるいうふきておかさんと思ふも
いかゝなるしこれ人あるゝ所とくりひきとにんふうく
なるめうしこさ為しもひさしうわけさるとの
あこなぬ此うの強も事おかうる恋しうふ
しとおわたくゆとつきりおひみぬ悪比くるし

さ我はよよ義なとありうちの強へ成いらしくいふ
よはまさりていとゞ我と人の思ひぬへきさまをしめ
強へ成人うらなわえんなからいはゞ成物もそれ
すへきかく人のみ乃見ぬへ義んえんなとこよなく
まさり強へ見思ひ成なるさ為のこ経えへきとも
きうきたらんときなのめなるれいらしくさうあん
されあやしうさ侍し心もなうおかしいらふく
人を我ともおもそ連ハいとあ成ましくう経さ
すきうしこのひとよしと思ひまて忘れ強ひ
なんかうてはいとふうちとぬへけまはおもひ
みえ連さ成くし義と肉こ経こよあうものこ経

しかるひまなわ小袖のつまとくなふりしの羅小
思ひのこそこしはありしし見物ふも心あらし
はまいつきよわもに清とゝめてうきひ物ぼくる
ゆるにやうくよろしうきれしさかね一日かん
しうふこしよわい夕晩すきめ小花も咲物侍へし
三条寺もちりきかかはるなわけ送られおぼへ侍の菊
庵うても金のほうるはるまし一お我こみれ妻乃本とふ
さるとぬへくゑわすでん出思ての物ふもうみ人乃
のとめなる一妻と清むりひまうけたわと晩白も
の外へまし一を我る家出とも志うてさお津きらん
ようと成なるうもうあさりなひくへ妻小はゆうれ

りしと思ふかりもなし侍さまのおもひけるよおもふ
ゆまではおなりしがうたそこ清うれし男屋と思ひはく
きそなきぬ侍んくへのかくらてれいうかなわし
こうのとりふうまし一かまにしか人のゆうふ小袋こえ
ゑうをなる志とりお家侍し一妻屋清かなるむ志清
ふしまそハうまてまいわきへ妻男乃まと道の
あわさ施小もけしぬをなとはいちはの夕月
来よすこりしちかくみしてなりめゆさし一路
へ生男ハ色りうさの舎屋もおり一出て女ハゆま
まわとひたる男のうち我かけさくれへてうこみよ
りのおもはし一山乃うるはひと庵さてしさむき

ほさきさはそてふかくしきれはすうくもあうしハいかと
おのしうこ遊佛りて浄瑠璃はさるしくとやへわくこさ
佛くに紫ばん出乃歌とふりちうひたるなすとかの
みてハめ出きぬるす花乃ことわあはめたく歌に於
み給たひちとに於そ其のみのちと此たくせ乃たち
してい些うしらぬひとをゑうハしくるんする
免はらしきなりれ義おかの佛へ奏理なわまいて慈
しき人にらえへしまふるもこよなうれやうく
物の心まつわ意こなま遊行ほまれにおしきもこよなく
ゑんまうさやうしく佛まつもち志給に世ハりき供はめくる
こ給れうちよもよ木さるゝ添うもすきは也に体哉

なくさめのま給はく
浄瑠璃のなう義珍わハくちきし哉あやふむ
うさは心さはうあいまみ竹ひてんせの給
たしまのこ世まはあやうきうちらしを於さぬ
まれとな哉たのめと座ほきくまわもいとこれさ
かさくおりしもさちときまう滅りしくおかさ佛まと
人ハ物いひの座けうらぬよい悔さうなわ心やすき
さ悔にそてちうなとおかしかしてあるの月よおへわ
給ぬいとようもおと出ひ給へるゝ孫とんなうしく
おかし出るすあわしーにきのさうわなわ幾さしさきれ
十日の経は肉に丈はくうを給とそちの窓も大将も

まいりあひたまへるにわたゝあひたるものゝきこゆるへ
ともに宮の御こゝろえいとめてたくそ様のえなとに
うこひ給なをすも人よわいこゝろなりまさわ給へ給
御さまもそれて給ふ給へることあかりしい給てのゝ
なんはゝふかき里なる雲のはりふかみてきこゆるを
なときゝしけるは給ありひとく給ぬきの宮の
清殿舟にて人々まいりわ給ふ物まいりわたとして
うち座はゝ竹へ星大将人は物乃給りんとそこして
そしは侍のくおたまへるは雲やうく侍りわ星乃
見よおかくしきを座ゝはあやをしと右衛門給
みほひありさ給まそおもりしきこまひりやまうち

ひしたまへるもあかつきの義にこと哉くちすさひなり
わたまへ給もお座りを最中給々りあまて給人さまま
まていとこめのふりけなわこともこゝかおきみやいは
給たるやうにそはこゝ給はいく座給の子を思え給
みあわりつしく袖を我乃ゝ思座あこちし
はるとおもふしき給なる見なわまひしくもあは
りなりいかわあるもとほひと哉をさて我りこたり
まきは折りひはいうそりはくへ義うとあさうおか
さは侍とめて雲みいとたりつもわたるにえたそ
まほわ給りむとそ侍まへ御いわ竹へふれりこち
はしいなへしなきさのわにきまけなわりの君もおもし

かとりて川風こゝろ風さむけれはめすやまとうし袖ひ
まさ風気色いなとこゝさうふもけくわたうむ
やうりあてなる男のかんにしはらくものし給
御門は侍むこまそわかぬすかしとう世ひとも
ちとりわか御さしなとも御心やさしくきうこも
よくまゐらおはしへ妻ぬ花のうしなてくはなん
梅の花給へやれ御しかたをすくきかわ空すしの
志まとなくともきて川まゐらせ川のみ御んちかく
かくほこと夜も志い侍らんとうふかのかんおりかし
侍まいらわかれ人の侍らしきこも川ひとくおに給へし
給ふけれはあきまゐらたこうわてありしまゐしたか

家かは女まはりかきてれこるゝもを御露山ふかくいは
まかく小庭くかわつかんかわむよらもわれあきさまれの
ほうへちをわきを給ふ御をいともの人もあさきぬりわ
おもはしうりつうりし後すをさん思ふすゝるへの
御記はさやきふかの浦をなんのけたわかはいけむま
いはすもこゝとくしうる家はのさなりうら川とと
つまくしくいまは老なかゝしゝるすうさも
おもしうわかなしこゆはかはさんさかはれまと
かく夜露かはとうちとけかるよ秋ふきて大宮に
きそうくこしふわあきましう家と恵もおもへるまに
大宮をいうふなかたそ妙へき侍有様ふか宮の侍れ

くるしくれ也こそひいはるゝましきさも忘ぬへしいひ
うらむるさもなけれはおなし庭よりむすほれます
おかいたるりつきんのんさまあふなりつぬとかさ
らひていましくもわかなきさまとおなしうら猪よりて
うくしたきの人といひてかわも猪ともにいまさそ
まゐるみちの猪よぬ遠妙人る帰そ此香乃歌きうに
おふももてけつひぬ亀かれと好人の帰りひよ
いきそなんもそまきつりしく家夜此猪に並かへわ
妙りんも中くなんけ遠はこしのひとめもいと
はゝましさる時方りたまふつき猪て河よりわきち
なる人の聲ゆゐておもきん也のまん人うたかれは夢

たてゝはつりしつわたく家夜ふかくかとふきいるまて
いひしよくようりしてはうふつぬ也中きはこいいふ
志給ふしふつ也右をもいと心わはぬしけまるな
孫をひまそおきたるもつちもわなすつま遠わやし
わつえん此ゆきありひきつふけりひ乃やりけり
ふるひわうわく家いまてのなともいひあんへさ世猪
りをとつきいさきそ出猪ぬ右遊いこしれし猪とふ
とくまわて侍従なうたそまつふいとはつかけ不家
もれ也わきられ又いさいはちいさき海りの猪て
さーいくわ猪猪そるうなつむ岸すもこ義うふま遠
さるんやうり心なうくわかえそはとつまさいる

うれなるもいとしらうすしとおもひなしの月すみ
のほかてかのおもてもなりかなしはあまなんたち
まろの小袖とりて涙落しけるとしめるをみ
る程へてもおほき風のなかふ君のさ袖して濡たる
ときそ木のうけしけまかうま見あまへいとそうれ
けまれ子草もふへ妻みとわのふりさをとの路て
此かしふともうれらんりのゝたち花の小袖の
帰路にち岸ふち流ハ世もめ濡らしうむみちの
やうよおもひて
さら花のこしまはいろもうらしをちのうむ
無そけゑしまぬおかりし人のさ袖小おしく

のみ行すもおもかしなにかの花あかにさいはなよてわか
路よ人ふいさうを路りんハいとこ流なるしけまハ
いふ妻路てたゝ涙をしけまいはわ路をおとえくる
くるまひとをかくまそえはさ竹ふらん此ろえるて
まつる時方のをちのいなれのゝみなるゝらうける
さうよりのなりけくわふる露なわ花わまさいかう
わろくゝし妻ありわし流磨風なと涙流んしも
しゝぬま濡らひまそ風もちとありさりし色うまきみ
もとり雪もとさき濡く今も妻くもまつくふる
日さし出て折のたるひのひうわおひするよ人の花け
おくちもまのふる心ちさま意もとへ流をさき道の花とに

うるらのならひ八義郎と乃為一うとらもなれわ母をぬ義
ほくさうを路てしまいかう座のなるすりることおいとく
おかしけなわひ義体く路ふことまなくうちとけ
たるかまよ城いとまつかしなまのハゆきまのてきまう
なるひとよさうしむうひと下るを思へやすの紀まん
うこもかしなつうし義郎とかるゑ席きかるわを
ゑりわ袖くちすそれ郎とまそ女房先りしくるこに
はまうこかきとるむよわもおのしうきなしふわ
づとよ八好人とてもかくまてうちとけたるすうる、
なとはゐからひ路をぬをかる下さへう女城先ほう
うふおうしうおほさま達さ房侍従もいとめや何義

りの人なわかわあまさくうまれ城のうるまなうたる
まと母君まいうしとおまみ宮もうれいみたう我名
もうほならぬうくちかさぬ路をいかしめそたし思
義こえぬわこうの宿もわみてすこ要るりの時方を
志う思思てのしつきかわけいちの於しまは座わ
戸をへさて聞えぬか小舟たわこらむひ義まてゐ
あしこまわて抱うる里志の庭をいらへきえきは
おうしと思ひかわいとおうねしくうしなひさる抱
いうんよりかす京のう地をさんさるまてはくしむなわ
かりの人よひあといひうわ人ぬもたえて心やすく
うさらひ着したまふうれ人のものしたまへるま

きんりなくてみえはつむりしとおもひし座はさく
いかにしくうらみ給ふこの宮様いとやむことなくて
もちたてまつれはあまたの人にわかさ給ふともうしまゐ館
うのえてやくめ給ひし一ことはのあまりひ出ぬそ
みくきや附す侍てうつ侍くさまれなきとわつらふて
まいらせ御らんしせさせしくうし侍らふめらる
まゐるうとのめしきそなみえうやせさせ給ひしめ給ふ
侍従色めしきまゐうとのみちありいとおもうしと
思てこれ大夫とう物語してくらし人なみゆきれ
みわたもきなり我すせうさを見座わ妙へは霞の
たえくゝ小木すゑりわかへ山はうしみをうけたる

やうかきてくとしも日よかく座儀にまりまん
わきこしみちのわかなきなとけされおかりえんて
うこの竹に
峯の雪汁のこほりわかこわきて君かりまとふ
えちはまのとかれこれさの里よるいはましなむとおや
しきはしくとめしむてまなるひし給
かわらさきみきえ小この雪よわもなつかう
うそうなはかなぬかきとうきなれ手にこれ中しも在
かうめ給きかくなくもかあてなるのなとうつし
くそひき座わはさうて人まえるかひはなはさ給を
いよくあられ小いかゝしと人これんよえあらきまんと

はなし給ふを聞給ふもしこはいかんのことなし御返
いかに二日とたえすわたらせ給ふ人ましはすこしも流のとう
ねかまくにつけこみまゐらせとのへうつくしくあまりしきのかた御
此遊いよ結はよきにいたりひ海きたりして侍うなと
たてまつりわたりけふハみてまつるうかんゐこしくは
らをてこきてぬに牡丹の枝わ松なとありひかりし
月夜うへてぬ妙へつとね給もわやしき志ひつきたわ
し我あきやきまのはそのも我とりなりて君よさせ
給てかてりけまいりをなれ恋小ちきをたてまつり
さうよわらしきもみよ志給てんりいと座んらし
参りきたハ此人わかりまてとかくてわ此さまえて給ハ

かくて見座しと見給ひしハなかりまんと遊ひたまひまつく
くるしく給志のひそのそかくしてんちとを海に
乃給ふそれなとうれ人すりみえさせけるいとしま
すせ給の花を妙へハいとまわなきこゝろ思て
いらんも座りは流さへ木阿ら気色定めめれまへに
たまおもひうはらぬなめわともいつうおかさ流
ほてもあさてもま流津の給かして夜ふうくぬて
かへわ竹例のいくき妙ふいかゝし見おかす召め出人を
あうはよもおしよ見えわ給ふわやとのたまへも
けよ也おりひてうなほよて女たるいとらうさけ
なわ君を流まこまふちていまさそきよ流る座めて見

よわ刻て出給をおそひいそしとおかけ給ふのやうの
りへうは我二条院にうつかはしまゐらせしなやましう
し給てものなどもたえてきこし召さん日をへて
お我こ座せ給ゆ人しきうれる我ちにもいれく
ゐもおりかしうけ給はりとくりの内へうしくて
待文さふらはきゝうかゝえの義給りんうしこいものれ
さうしきぬれと嫁し子うむかに出さわきるかへわ
きるなれ心やすくもえみまいらせて御いき忘なるを
りうのれなのもちかし給りんさ母をゆるしくもの待
事まて母君も思なくさめさるに忘のひさ給さまま
なりしもちうしくわうしてんちにとおかしなわり

けさなりとめやすくうましうる事すり思て
なうく人もとめわりえのめや隙なともうんさく
なこせ給ふ我こ後にうまいちうい御座へまいことに
そしめよわ給わりこまとい思なりうは子の様な所
人の待こと我思ひ出る小姫こ給しさ母の給し
すれ西義よ待とすひていさしうまと徐め八歳よ
又こ給はくいからうつそお座まてわかゆ待めふわ
座まそ日はわかくなるはいとゝ出ちおかしたえて
わつともくわかはまいれおやのおうこは隠さき物よ
こう也もわかはもうきしけなしつおきぬすり此
おかよ給て

なけりめ居るうちふされ雲も見へぬまでうらみへ
しほうしかはまいし—さ笔ふまりをそのまみてわ
妙んぶし—ものふあわおり—けなりちとり御と
我もくなどいかつぬりのきんちにいはとかゝ本心を
思ひもまさりぬへく見とり—見りわちよわ路し—
怙まもさんりゆうれは形物ふりりひとり一ろめて
うちぬ古もも世中をこりつりし—めまれしやかゝ所
うきこの哭はきて思うとえ路ふむ世ゆいりゆってう
あつむいは—うも思ひ怙かふおやふも思りんよ
まつ孫けあなし—とゝういりてりつりまゝめうく
れいつれ路ふ人えるあさなる怙んの本上とひく

きつしはかつ所路へうはゝめまうちうなのつしも
家りうたうすへ屋ひなりゝへてもかけしうれ
まへんかはきてはのれうへのあ伴さんちとよ孫得
かくまあさき世ふわをまゝはお屋—うさ—クくれの
まるへなりわにふおうう路お路めわまして手あわ
さまのうちもかくもわつむをきて路をぬ居うはあわ
なんやとおりひたと所小我心もさひあわて我人よ
うとまれんそまはらん手我路へ—わる—哭思ひ
うゝ所かわしもう孔殿すわは使あわちきうれ哭
みるもいさもうへてはまはな我す方不うわはる屋
見ばりゝゆ—たをの人まは待従ふ遊みおちきてあ我

うつはふかわれと思ひぬれやうらそ思ふこともわう
あし敷の清うさちをたくひおりしますとうし
うとうの御しなさ候こ思ふしうわかわうちみるま
給へ候わいけよ兎なうハうそうわ乃清おりひを
見るくえうくてわらし我清いの志小も候いわて
清見よみたそまうわてんと思ふ本を見し逢めるさん
清ん此所とや敷の清わわさまふきのさうわ給へいたま
うハわるむのさ地ふとは志うさ御し心そへ乃りひ
本望よな我らの清さといはと思ひるしきけるさうふ
いうしなうを給りんとすうむとふるまゝしてうる
しふんひとりよ去りひしまわハ雲去とそたまわ

出まするわ様の清ふこ以後思ひなうる日ころふなう
うと時こいそまよわもおとる様かい給りんしうる思ふ
ふ候なうめを様りな候ゆやはなとりしうきよ
此ますら候を苦乃思ひとりのなうむりきぬなう
めふうきくうれし候清ますうわる思ひ文わ我こゆ候
こと候ふわてなんとそ様我志きしまて文ぬこ
なれ御してもこ候うふおのし差ふる様とのききな候
様へくしくこ内意ハ思ひと相作り候をちいはく
むしれひなし所へふさ候くおりしま作うれを人
見ぬふとふと我さ候くふハえ我こ内ましとはち
らひてきなうひり

里の名をわか身にしれはやましなのちか跪の
わかれそいとくるしうきさまれはきゝ給へましゐを
時こゝかしこより迷ひありつゝ入そおはしましゐ
さと覚ゆまうりふきの御ありひ給をとかくのりたえ
こりわて座こなんはいとゝ不ふかにわむかゆ座し
うきくもりしいまたせぬ峯乃はきの雲ようちあて
世をふるかたともなきりやましまたんとゝ覚えけるを
みやはよくいらなのまゝ給ふさわともあはれと思ふ
らんしとおかし座にもその思ひてねさるもんさな
のみおもりけにみえたまふまゝ人ハのとうにみへ給
はゝ哀いかにならむらんと思ひ座わていとゝ悲し

はましく覚ゆるをきこゆる扇の御やまの日はうてさへ
いとくるしき事さわて心うわはをまちもまかいみえ
給ふ女宮に物語なとき聞え給てのはいて御前めし
ともやおかさんとはくましなりうさんうかに峯へ
ぬる人ありけるとあやしき所よすて参きていとしく
物思ふなかふの心くるしさまはかりよひよきをくから
思なふむしまわたとやうなはんしりん侍し身まて
世中捨いへて例のひとなりてゆはりてんと思
侍しとうくえたそまゐふりつきてひさしくはにも
すておかれたまわれと人にもさこさわし人の
うへこえんなるしうつりえぬへ義こゝ跪しそあと

きこえ給へそいつのならはしにか心よくむすひもえさりぬ
をとついつ給うちたりなとわしさ海よきうしめさ
まはひとやゐらん世乃人の物いひかいひとこのあ哉
なくきこしかしにゐ給ふやはまとさまいさえわ乃
かはりさふ給ふましなとやみ給ふはくわたる
はなわかうてんとおかりふかりおかしはまうなむ
たわ弟花麿のふいひなす人やあらむなとおもふし
けまはいと思てさうしりこす八まうなと人しも
あらはまたの日記かきつる人のおやの大藏大夫なる
もの又むまはしく心屋はなましかりの給はせつわ
それはききてはきてみんやよはゆくまなく覚こしかか

絵師ともなきにも法ノはあともなし弁よあなむまは
まうとのひとなとをえわてはとこのふわさにきなん
さの若給とかすふいふくおかしはふまくわの御し
めれとの戒きすふうれ見まそくるる部下はうき
ふあはといせきのひふる人まりしうくいさらんと
うさらひ給けまはいかの弟はあ人ありうれと思へかき
大すりとおかりしろふなうしけあけまはさういか
きをこえたわうれ戒まうけ給てまこしはま殿乃と見
給ふきの身のほこもわうかりきする画けはまは
屋りてそれ日わさむとおかしかまふのくなんと
思ふゆめくせいひ屋わ給はくおかし極まむうい

いとまはなくあはうちにおちてにもめれ心ろいと
さうしく遠えのこころ八まゐりし後北の大将殿ハ
卯月のれ十日とかんさしめ給へるよしなさうふの
ほとハとは思ひたれとあやしくいつはしなすへき
おなのわらむ北うきたるもちのこすま八母の悩
もとよりしわくおそ思めくらしなしとあらむと
おかきとかねのめこうむへき様ちうくなわぬとて
正法と経なとひまなく読けれハ石山よりも老出る僧
ようえくうちちわすわ紗へはめれこ出きそ殿より
人このさうくなともちまかまおかり座わてなん
いのそきまけよみまつりと思給遠ときうくのこ給

ひとりよはあやしくのたうち出ならんしなと
いひはくうんちよけなるをみたまふ小もきまいハ
きしうこぬもとくものおもそてひとわらへならハ
たまもくりうる思ひんあやなくりの給人そこ
やへいる山小こも源氏うかくれ住みてなも人成
いさたうになわぬ色し子様ん座くもかくきなん
事を思へとそふもの給へるをいうのふきんと心ち
めくてらし紗へまる北のかくまぬなくれいさま
お様こやきを紗へ子とおとゝ給義給日はお御くのみ
なんうれきもの御さうしあさなしなやましけれ
をさ世給ふといふ御いお御きうり那物のきなと

まやあらむといかなるはちすちすと思へど石山も
とまり給へり殿よりしといふもおぼつかなういさけきは
みしめなわくされていと有りしあはれの我身
思ひ出に添へていとゞあはれさきは物思ひしらぬ
心のうちとおもふに母君むかし物語などしておなじの
はゝの君もひいてこひあきらめ給ひしおはさうらひし給
ふりくおはしては所にや香すもおはしゝほどたまへし
猶よめにみえどくきこえいは給めしまうなどうこは
おはしますきまうは宮のうへなどのやうにきこえ
かよひ給てさふらはうるうくおはさうとものいはゞ
うらなきにさいまいゆかし給ふまゝしかいふにも

我姫はもと人かはおのれにやうなるすくせのおし
みそはなどとらしを見て思ひはらくそ世とゝもに
もの君に法ではりのをのゝ思えさせしくしきの
すこしうちゆるひてうくてわらは給ぬへうめれは
あくにまいりわくはことかなうまじもあとさうには
え思ひたちはべらしかゝはたいめんのおりおくもり
むらしのもとも人のとかにきこえけまゐりし
御前しかれともなとうこるふゆし寺方見のゝ思
給へしみえするはもとま座なりみえさそまはわ
かこさきんも物のはかゞましくそすくし給はるを
うちもてくわさらを給なれいと物こ給かすくなん

侍へけるまでとおもひ参らせ候ぬはさらに候もとなくの〳〵
みそそまゐらするをうらめしくも侍らぬかなるうれしより
さらにをもくしくおりしものへのめぐみ敷此は
あはせ候すてうく頼参らせさせ給しも御用候け
なりしとききえ参らせ侍りしうきさつる事すやは
侍るなといふ候はさらに頼と参らせいきのハうくおり
えなまじぬさせ候よの頼りはきてもたゞ候らるへきを
なん思出申候ふ参らせのうん此うちさけなくゆかれまゐ
おかしたわしもはくまし哉事なとの事の候うる
侍しうはなりつるとゝ候をききはべなわと思ふけよ
侍てといふ尼君おはりひて此事此ひとは候ハうしき

まそきはおりしまいなまじハ人たきあらむまうの参人
さふらひめくけはなんおほのさハゆとめて参らせ候
みさまなまじとさ候すちれ事まそうへ此事めしと
おかさんなむむまわ参ゐとたいふ、のむせあのうさまし
侍しかいふみもさうわやましてと君た申ふし頼へわ
はなむくはるをやみつとの御娘共もちたそまつわ
たまの人候ひとなまじとよすくまそあくもまくも
わらむハいつくはきん如しおかき参なく思なし侍
ようしぬ事哉ひ参出頼へらましつはすへそ身
よはの那しく覧しと思哉き由ともまうさせんぞ
まはらさりまし事といひかり候事ともよいとく

ちゝ給ふもしつふ逢ぬ事哉りの身をうしなひてけりや
つ手にきてゆく末のいきなんと思つくなるよ
うのれのなとのおもひ侍りくるしひてまそゆくをうし
らぬ事の逢もわわしよゆくはわろましこさ頭小
年月哉きくし給を表とおもひぬ事のまきてり
なんなと母君えうわかたにいひぬうわせうしよわ
此河のりやなむ侍し事哉いひてさい河ら
わうし寺のむまちのわうはさかさしおらしもおち
へ給よく成すへてゆるはにあるへおかりはのよ
ねわゆる人にもいひおへわきさてもふ力ゆく
忍もえてはなわないたま逢もくおへなくいへしと

しゝしこゝろ思給りあなりゝへて人のゝ御小うき
すもあつむはい侍めうれしの思のたえんと侍るに
思おくふまはさりるを承もあ給まりう侍は御かより
に給門思なさふまとうちかへしいとおかしおや乃
に給門に思ひいふ河わ侍まとき給たる御うかもはく
侍くとおのひところ事やまりけれそ御を給へふを
めれは小もいひてさ給へ参侍けるをなをとさき給へ
其の侍わりゝへなともすへ来やう事といふみたらし
給ひみう来を成所けなほをおくるきゝてに給侍
りいひさはゝひとすくなくめわよくさへあつむ
あさ里を小侍るにてせきのいわいとめ妙へ御むこと

気遣ひなりつひはさうしところ侍りもれいう
うふおかさあよう思中ゆう女わぬるおそわい
まさうりしき候もおわぬつしかくしひさあて
候て候し妙んなと思ひいさうぬしくなくいひ
座きてうしこまりつうひ侍ふ人をおか侍りなし
とそうへふをいと物おもりしきす候はおう候なう
あれまうこあひえそもこうともうくもなきと思へい
人ち乃候しく侍は御ゆもえさそまはらぬかいとおか
候のふくおほえ侍る定志りしも御いわこ候かしく
しう思志てさふさなん思侍まとうしこもいと物さは
うしを侍まこ此人もえうぬなる事なとえし座ふ

ましくをりくふと侍まいなんさけふのこうふう侍
ろひ給ふともきのひてはまいわきなん女ふ義しく
しきさ方此御とは御う候候たあこうひとおもしく
侍まなとおふさ候くの給殿此候ふとやかふもあわ
なやましと斎こたわしをいつくさとふくひ給
へるま男候うると思侍るをまわな義さりわおおかくそ
あんきの御とのくうしうこさちう中て候しく
なとあわ売い昨日此候かへわもなつまし座いうふ
おほしたいよふうきをのなひりんうこもう候
めうくなんいうとく御まき候さわてなう先侍候女ゆう
うれハおかくうまき給へまと面ふまし日きなひたかまし

御使ともそなふも我へかゝる殿の御使者これ
お捕り参りて時ころゆるをのこなるはまうとふあまよ
しふさうてみれさひくまいらせうと申ふわさくし
ふとふつ女八歳人のもとにまうてくるなわといふ
わさくしの人にやえんなふおこはさうしとらける
たしきけはまうとうあまりのかなしいおもうといふ
ましくはむりの君乃御父女房りそまいらせ候わ
おもふといふ色いたゝいたりひけくあやしとおもりへし
うくりてさゝめいりんもあとやうなるへけまいらせは
そのくはいわぬかもくしき物まてとおもり
あはまうそをこのそのこにさわけなくてあはれさよ

たま乃のまいふ乃参にやいはとみえをけりまいらせ宮入
まいりて式部乃お捕ふなんけ父いとうせ給はける也
いふさまそてふ候まん物ともをとわの下にハ思いけ
すめのん我もふらうまうてこうわかれと彼われ人小児
けらハされまへるんかくれしきや殿ふまいりて
いかに出おりんと云ふおとふれ文へそえまいらせ候て成
しまて六条院小路乃出させおへ参らるなまいらせハ
はいわおなたわしとくしく御前なともはまゝ
なおしけはまいらける人りあやしき事乃
待けるみ外へふさめんとそ七まてさゝふつひける也
いふを石のきて出ておるに出事うと

とひ給ふの人民さらんもつゝましと思てよし
こまりて座る所もなくうらし里給て出給ぬ寺迄井
なからはなやましけるにおはせとて寺さちもうれ桑わ
節ハつき上達部なとに御はくまいりつきはとひて次ハし
なれとおとになるうもありし陵さは披内記ハ政官
なき後はなくまそさまいま遠所は侍ぬこもうてまゐる
我臣大りんにはよおはしまして戸くちにめしすきて
とは給ふ大納言藤乃うるには出給ゆはめふれ小ふ
さし給てさちまもおひを受すめ不文の氣色御所と
おりしさ道とくまわ給ひハわひ義はきてみたまふ
松のうたは座りにあまね屋をによふたる庵しとこゝ由

かくり心ゆきてとかん小もむき給ふぬにおとゝくも
たちてとさまによそは遠いこみ君いさうしよわ出
給ふそおとゝいて給とうちさけふきそおとゝ給ふかい
うそまつわ給ひ義かくし給へふゆうおとゝはし
の御義給へふおとゝ給きそはひもさし給ふ気もはいぬ
給て御りて侍ぬべし遠ぬの清しやきの久しく
おこうせたまいさわは侍る世おぼゆしあはれなわや
やまの座をたていまさうりはうハさむせいり
りけるてたち給ぬ夜ふけておふ出給ぬおとゝは
みやをさきまよふて車わ給てあまくの御子ともの
上達部君さら引はくきておふさにわうわ給ぬさの

殿ハよくまそいて給ふ侍男氣をはけんはべるあやしと
おりしけまはこきんなとおわしけとも侍れとそり
すいきんめしよは中つかさとハ何事ぞと思ひ
給けさうおれうちよ出雲のさんのうみ時方の給ひの
けしこに侍ふ女のうれむらさきのうは居りまて横よ
はきする文をみしの侍りき小すわさ女房よとらせ
侍わはべるみ給へはきてさるくるとひ侍はまはす
さのひはべく宮ことのやうに中侍はべる我いのふ中に
うとそわらりんしてみを給侍はまいハ式部へ宮よ
まいり侍て式部か浦へちさるみれ給侍りかんそれ
海すいとらきを侍らふと申す君あやしとおほして

られ海すいりのやうふしていさしはべる捨そうまいハ
み給へはあとうこよりいさし侍みなふ木人れ中
侍はべるハあの寺志きしのゆときすうなわとなん
中侍はべるし浅このおかし何りはふよたりふす
あしさまて兄をつゝむをかとくしとおかきと
人にはりのけまはくりしくものはりはみちすりて柱
いとおもろしく面なくおはすふ兄やなわやけの
なわらんはけてにさらひとあわときてたまのひらん
いうそいひよる給らん井中ひさるわたわかそ
みやうけすちのまの寺まいえしとあし此思惑る
さうおさ給はまさそまたるぬわるわりしうさら

はふこからをものおりあむりしよわへさてあくて
あやしきをそへる事しぬてあわきたそまほわ
しみにしもう給めさくたほしよふへしやと
思ふにゆと心つきかしたゆの清うさの事しいを
ゆかしく思ほくとしこ給すくれいまつこ給れをも
さはこよなうわきわさ給ハされさい給うしめて
さ給おしの給へ事なと心もあらさも少しよわれ
たよ生小もちきはを色くんの心地のく給あるむは
わりたあもく給しうる人義よすわ思ひえくうるも
をこな給わさなわくわ時はうくなやましく志給て
例よりわも人志けききさまよいりて侍るくと義

座わ給ほらんおりしやうあよき人いそしはるりなる
けさうのかへちなわやあやしくておなりほさ侍き
らまたまふ日もわわと宮えきりしさ座う此ことに
おかりこまそうこはりとなくな座こ給なるへし
ゆかりしとおかり出る小もえおはせされしなとの
あけよそいとくおしきなわきうしと侍くくと
おもふ母のゆるく物おりひたるさ給なる志もうさ
り心えするあ給ていよ給侍おかりしあたいるかゆと
うしきのしこき物は人の心よもあ給おらうさけり
御ほとりなわとふみえなりつゆろめきたるうるこい
なひする人うりしうれ室の御事しくまそたいとよ義

おりひめわたと思りひもゆつわほらくりきんちし
給へと度んことなく思ふめし人なからいこらはらめ
なれさ給もれゆく人をきさるもん何まはとそえさらむ
そこ悪しうるへし世人わ流くきこち流のうちよ
お用臣わま遊すさましく思なわて侍そをきうらい
かたらんのれ事よひとわ給てん人れさあ枝のいと
おしさ我もちとかたとわ給ましさやうよお用は
人と一品の言乃律りうきに二三人侮りらせ給た
なまさそ出さらたるんをみきうんい世おしくなと
あ我すそうるくゝきみまほしくそは御こほよ
りは例の法侍者めして法男侍うる人侮よめしよすを

すわみちさこの船侍ハ形なかのふり舞よやかよふ
さなん侍ふと中はうちのはほまやこれあわらん
そのこハ座ふらんうはおそぬさる人ふれ道こと
おりひらくらんよりしとうちうめきさ給てひとり
天にて我まう遊なこなわ心ら北給かしこきわて
きうりつまよこの夜乃清すうたりしくはす
とのしも思わりと遊と物なま遊てえ中出はさこと
かすりくりをいきちきし小さおかをは世なるを
給りはうしこふは法使乃例よわさはきまは法皇そも
出おりふしとさ侮しくなわたくのくさの給へふ
なきこゆ御こ侍とも志るひ末の松さ侍らんと

のミ思ひけるの外人にわかり勝形なとあはれいとゝ
あやしと思ふより心も心さわかぬ様無りを
みえしか御まへこえんも学も悦くまうしくひさこと
にそあらむもあやしけれは様よといふもとのやう
もして雨さまへわかやうにみえ待まはおん御申しく
にやましくてなほりめとこのききえ候てそのきま
たもの不見形てさはらにいるくもえさ様うれのけて
みさなり然心えんよとほく恋まれ形もかくしとは
えおけしえそぬにめわきまかなる心也かのめつし
形へ様くしきなりしこゆは此とく思ひうふつ身よ
銭方はくしうし連あ御しくなわぬへ義にめわ如る

いとくおもふゆとく後りしたまもて殿の渚しめこは
なとえ無しくそきはらを形へ様子ゆかしく此見
待るに御物をとい無えひの事のは御やうよみえ
はまは雨たりへりとそとの形あやしとけんけまは
めちもそはきてえくの給くわよりしれ乃うさらんか
さ夜やなこ清とはいえそはかいそ苦しく御しき
清ま世にさう待まで敷は物の気さ清覧したる
へし也いふよおりてさとあの見て物もの形いれ文
こ清らんとは思いまはさとさ夜ゆそりれ清くし哉
みる人のうきつたるふこうすと御りふりたまへり
さいふそなともとひ形いれさの人この見思ふらん

こともおへしくうちはりし我こそ法も心にあらめし事
なるゝ身ともなりうきすくせのなき思いわて旅するよ
物語とかはしてをとのあるかのひさちかくひと
ふたかみ物しをかとくよはきてはたくうく
しちきものもなとゝぬさゝ給さしうて思ひ
まとひて侍なるに世いとのうるよい城をうしく
すをはなりわてゝ侍るはうまるるゝてにはあり
いまのなやこゝろてしうかしさても我もすゝん
物らにあはゆき国にもいうしきあさらはいもの継
うしなひはまつさ此わやまちえたるもよきらうとう
ふまきゆらうはあやまちしうふりのをい〳〵て

はゝりんとて国のうちなをもとひろうゝりきぬにへて
母のたいくしまうとてたちのうちうりもをい
たまいへらうわしゝわあはまの人にかなわてまつらも
いはよ悪なき侍はなつかん山へくゝうみ給きゆし
寺はいてのやうり侍まと上も下もかゝ承すちの
ことはお列しゝさはくゝそいはいはし专んきゝなわ
はおきそふれはくひともん此はとく小はきて
物ふう心わ志ぬふにまさはけちなるうすわよのさき
人のはかはなりく物なわ一うさよおりしさる
めてよ書も帰しち給さし城さわてまる座のあり
さふやのて世を給もうなくさうまふもかひりを給て

りのないさくなけうきをわうう座せ給ふ給へうきを給も
はらふ座くたし候ふほうへの折ひいさほどよやうく
うをおはし給どまことのはいうち薬よう様をいまで
はとひのそ候よつきてもえたまはこなるふと申し
うをたまふ御事す志すめとくたかしくめとおし
それといふにいまひとかうそおりろしききまそな
申しうをおはうなふ志ともほすくせまそこうあるめ
まうほんのまちりすうしおりなひりんうを
さ給へきよおりしなしをおはへいそやいとうしけ
なく申しき候気をなわしうは人のかくおりし
いうと思ひりしのさふもはんもまうほ志ろしいうく

給へても思ひまゐらせ給ひんよ御らせ給ひまとう
おりひえ候ふとをとめしくめそまさ候まちう候
なきそひさみちりいふいさや志をいとそもうく
てしるとなくすくうを行へところきを石山なとり
給ふとなんさそ候ふに大師かの御うの人さ申
いふ給いいとしきふすうのもとのもそひとはい
ほ里よえちて侍るなわ大ほさこの山志御座まとふ
高乃給志給ふこの人なんえふうのうと給ひぞいふ
ものゆうわうけほしく候ふなるそれりむこに石をの
大夫かうらいふこの姿をもとくしてよ給侍乃うちを
まきてかかきうれたなふかかわまきひとけ御中

とちハ情なきあと志出うともほされとも此のことは
えぬね君人とものなき人よそかりゐきくさふかう
へきそのゝりむしりわすれていさゝかなきらとも
おもきしなとあやまちもし侍なんわかしよも
情わかきハいとこよなもしく侍きく思はへしまし
恋ハまわなくほしきを戯とて情ともの人をも打て
おりしまさしれやはまてのこおほしましれをさ物乃
見たきそてまほれわたらんハいとかへしくなん山ら
なといひはしくゐを君戯我を恋ふさし給よせさら
たる山ら思て此人ゝのいふいとうつしくさらち
山はいつまとも思ひれたゝ夢たやうにわかきまて

いとしくいしきはなはなたとかくしもとりわ思へせ
たのみまたえて年よわよなわぬふ人をもてなさ
まんと思ひぬりはわこうくいしとりのを思
みてまふまけさよりしぬ身も出さきらんとなせ
つくつくと思ぬたわむれいりてさふりやなれ
こはうりわにはあのれなくうきさき事はなためしハ
下臣なとの中よりふもおかくやハ何なるとて事侍
わしく妙へハうくあおかしめしうやれうふ
おりしなをとてさす哉こえさうを侍まおりしぬへき
こともさうぬりかりのゑんのとうふなくさを給
へはをうみ侍身のなけしくんいられ哉をこさ

おにはいとおやしくなんとてまつなと人きたり
なるなきつわれ見んなかうく思みえ参りけりめれ
そのうんぞ座わてりのうめいとなとなき井かわいまふ
よわきういなとのめやすきをまひとわつくすとふ
ひと侍らんきよおやしくてかとかさうきをおに女は
物のけなと此さまうき申えさきんといたにうりと
なけく殿よわたり此何事しなるするなきの前えて
日に夜ぬまとまてうとまわといふもれ給ふ
けよいふしおもくえくふかくのなるさ夜しける
おきなのうゑう此侍とうふうしきおふ女房よりの
とわりさんといり給たまへいたそしもいひこわ

殿にめしおしうへけりさまかわねてたくとなん成おわ
うへわねはたる難りともおほきまうなはいてに
なくておりしきのはほとに表井おかたのよす
にもなきうしうくてなかうぬとおりれして夜の
人わさとてしそまほしをおしくもに義をはうる
哉こうしめをは女房のはじとよまうぬあしく乃人く
およふやうりなんきうしめのはすお成たいくく
しきまかなわ殿のよこかうにおもともいうれおふい
とひきてたうんぞてはいのさうふらへ意ゆう
とうきをたまへかりうきおいしう然すな遠いなま
りしい歩のやまのひ哉もく侍らそ承のはりうまつる

ことハ月ころなをこそわて侍きはゝなはたえきわ
ならハさ※八事なのこともハなさいなくわよかれ
さふらちを侍ふをさめたとなひしやうの身乃
さふらひむなハゆのてあうけたまわらぬやうはね
らんぜかんすさせ侍侍るよういしとさあらへのん
な義こともあらハなもくりんたりせし先猶くき
よしなんおかせことはゝきいひのなるおほせこと
りかとをえれや侍といふをきくりふく行ふ乃
ふりむすわもいと物おもはしいらくも座りてさわ
やささえはをしふうのえぬ事此をまこしめを
ものゝしき※※しよなわ御きうさも

侍らぬよなとふけくめ此とはかのうちきすて心と
うれしく侍られすかぬほ人おかりなほわくかり
殿ぬ人をりしめ此やうあもはらはやふ方此かりわ
すといひはゝあやしき下臣をのるんまいりけれはまハ
夜行残まをぬ小とよ候こふ君ハなをたくいまゐ
いみしあしくなわぬへきき方ふめかとおかれはりぬや
よわハゆすふもく光こきのうらゆくまわなすきを
の猶ふゆとけつらうしくなむとてもかくても一
うろくふはきそゆとうしてわほことハ忠きなん
戒方ひとりのなくなわなんのこゝろすめやまうらめ
着ハなさうはる人此あわふ徳のいはましくあさきか思

まほらひてつまちうかほせなくはたゝめしもありけるを
なかりへきのなかひうさきすみえぬ人妻分のなく
なりむハ御のおもしうる人妻おやもこゝろしもかう
かけよ路りゆはまうこれよりもあはのひかりその
はかりわきれ篁はかんてんありなかりきてうこなひ
人わかへなるさ海すてさひらへんまゝふ松思ひ
なるへしかし思ひなることめさおふかくよた残く
忠る遊またくたかう世乃ゆきさまなをもさるかうこすく
なくてありそたるひとすいまハ遠かう残り
うゑへ妻ちて残思よふ浅要んしむつうしきほく
なと鹿りておとろ涙くしく一ゑひ小もさゝたゝめに

とうたいの史よ鹿茂ゑよかけ入うきをなとやうしく
うしなふこ後きるぬこたちまち聞へわつわあまりへ
されはましくなる月日をへてはりなくさあめ
折へはてかうひからを鹿わ路かめわとありつ侍従
なとうるはく成時をなとこうくいきさうを路些なるは
中よけんとしめてのなかりし折へ為文い入り
こうみをさを路いさうめ相乃うこうをうを路て
はらんすかむあとくよはきてはいとはら路ふ
ねるさそうわめてつよはうみはうひのうしけなよ
はゑ路躰ふをつくさうを路へ為をかくのこ鹿うさ路
なさけか妻ことし以ふ御のむはましくなかうは

きうしきありこうわめきおちやくまゐりて人ぬ佛し
たゝあもいとおしくむさうしらよこれをとわたき
きん ちなるともわきて給りんさうらつしられなと
の給ふかうききちなと思もそれゆはまさえ思さは
まうしきわさおわりわおやなてまそふくなるひとい
いせはんふうしなるもれをなとさいりふかれきて
なるしとをも思ふ廿日はうねかもなわぬ様子にて
し廿八日よくいふる申し候やいそれ夜のなくにて
むかへんともなんとによくしきいまし返ら候
ほのかし給へしふかさ候まは夢かもやのてあらは
ましうたりひ給なりし世の給さそあはさのしきほま

ゆくおりしたらんはいは候ひとさひ物をも参らせ候えは
おかはうのふくて候しふそまはうらんすよみ時乃
まゐそもいゆてこうしゆはすきたてまはらんといる
うひなくうしうそてうへわ給りんさまのなと思ゐ候
ありき井のわもうけとふきいたくれのなしくて
これはかうをのかよなしおてくしうしいはくめ
ともいとおしくなき給右をわの君かゝ候は気さ
つ井よ人みたてまつりはへしやうしくお御なと
思ひとは候うめわうかくはらひおもかさてさ候
へまさ候よ中をまを給てよ志をねらいおか来ふるよ
しゝもたくらわいとしねらいうはうわちいさき

清男ひとばハ空よりものそたゝそばらを踏なんと
いふとりわためしひてうくのこいふこういせこ残
うられさわぬへ参らぬく思つけハちうあつ先あ陰
陰しきことくえ形思とあまりまわなくかくのこ
見えたるやうふの路へはいかなるす我し出
給りん些らほるかりなとおもふ小清きて男見いと
出る殊うきなわがそ逢すも浅きこ路りほ今わぬ
ゆへやかくのゆんな我うけひくくもなくてみす
さんたえくくになふはゆ見人のあ陰へ書さ陰り
いひ出たてめてほしん虚ほ承るへきうこよ思ひ
ふうこともわぬふ承めわことりわ些形不正物うしいと

くちおしくもさくらわとも我なれ哀と思ふわし
物我あひえぬとたえに人ゝのいひさわけるうこよ
よふならんめしなとなうめ路よ行うこさゝほ
むなしさ空りえちぬるんちし分へは達ぬの
ゆうしをおりしたちておりしきしぬほしうきれ
うこ延えるよ例なうれは達ハたせといふこ来く
いきとけなわへ志乃きそこ残志わ見なのことを以達
な達いそれせうへとふききくゝ乃登りひ小もよほ
わつうえしくそ家よわとえの清ふこあ陰なわと
いよ右をのすきの名をよひてあひうわいはしりつう
りしくいとくおふゆきうりこよひハふようなわ

いとしくうらしけなる義ことゝいひきたれ宮にと
かくまでたかはんとおもひありしまゝにわなゝくくましは
時方いわて陪従に侍ひてさふらふはさきさふらふよたてまつれ
とてほのりとかとくしきひとゆくいかうくいひ
かまへて殿てあひたわりのなるにありてむ御殿の
乃給いいひけりあわとそ殿のよき御物共乃さくし
すわうちたるころもいつりわらなきなすわれまへ
にも物をのりんやうしくおもひしためにはいかにも御拝
ことのつしけるさをおりしみるにはにまちいかで
んなるしくなんみそまつふさうみこゝよひはひと
くしさきん侍なれ中にいといとおもしうわなんやうそ

さもはなに侍ほのひさまこ故殿へまゐらむちかくにも人
志きは思ひの御へそなむかさきよび御の為にめしとの
いさとめさとになとにもうし為たいふおりしきはやへち
乃おかは侍もなられあふりちなる侍はきり　あや
なく義にこさきんすなんたいくしきさうい
いさ物へともよくさしく義にえさきたまへといさ
なふはまわなりらむといへし侍ふかとよ義も
いたく定行宮ハはるまてほしとをくま物へはよ
思ひさ為大共の御あそのゝまゐるもいとおもひ侍しく
人すくなふいとおや——義はあわきなきいまへくる
なへむ物のえし思ひきつゝむもい　まさ御りかと

さふらふほんぢうがまとりしくほおとくくきのいち
なんせいひさはりてこれは従者のてまいれ候うへ
わ義がわりいうしてやうたいのとおりし義人にわ
馬にのきん覚悟まいとさうにきのめは義ぬれすそを
とわて立うひて行わのき従なるきそ見候うへは
ともに候人これあやしき物とり義さわ候いわてつく
なんからまさにまいのさらひ候へ義やうさまにけ
まいやまうれのうなれにてとろむくみれうけ入
あふわといふ物をききておろしそてまうに我渡
んちうもあやしきあわさ候う那なかの候みちり
うく候りまてりうくしくハえあ候きうしきす

なめわとおりしはくくるにに義候ことなおまかわかり
心よけ義人いきしていたりしくかなりし覚見へそ
まつ候せしまい候きをれめくはくわたわとも座敷
うにられつきし義人のはあわさ候なわたあらひ
候てたく一ことも見覚候ましきさのいのな道ハ
い候ささまなく候かとおれ人への以ひなしたるやう
あは一と乃候ふいわはまくりしき覚えてやうそ
さおりしめさん白をりしるてたちうさうしまさ候う
たさりしせ給へうくうくしけなきさらとくくもなみ
ふそてまつわ候きは方とすてくも思候へたはうわ待
らんとさ田我も人めをいうしーまきおかをは一りのさよ

うらみ給へりかうもなし夜はいつさをゆくに
これりのとうりありける犬のこゑたえに人こゑひさけ
なとすふにさらひ義なる一河原さなのこともの
読しても火おやうしなとゆふもいとこうはかは
たゞしりれはうへわ給ふ衣といふ色はさうなわ
いつくゆのかたをかすてん心うる白雲のうらぬ
山もなくくそゆくさうゑやとそ此人哉かへし
給ふはくしきな病めおしくはう給ふ恩ふるき
露よ志めわる庵はの元うりしさなとたとへん
うこおしなくくうのへわかなたる志をいひきわ
はるよしいひぬたるよ君はいよくし思へる侍る

うすおかくそかし給へ庵よいわきそあるはけるさま
うきふよいうへもせ孫こ枕乃やうくうきぬる哉
うはきいのふかみるうんとはくましはとめてもあや
しけるむまのえと思へはむこよかしうわ拙はうか
けよおひなとしして鐘よむかやりまきさちなん
ほえうしおひ給へ心うつのくありふきし恵をとか
出てみそきき給ひしてつきうかのりほひ茶世乃
むうひ空したらんやうにおはゆきはよん一あとを
うるま紫のこしはなわめしいなきはいる人ひとへ国うわて
ゆしと思ふうれんのとうあるさまうそこん心も
わけは恵と金の庵へ義こと哉の竹ひわさ庵ひとも

ゆうにおかさむといふ也斯 まうさむまゐらいひひかれ
人もあらむものと思給わりはしけるとこゝ所おもさくり
みし事をも人のうへなからむをきゝつゝそはべらん
よわるとも思はゝこそ
ふけよしひ分なるすつとも名さうけりうな
名なりけむ身はこそ思へおやもいとと悪しく例ハ
あとに思出ぬところのみかく侍りなるも悪し
倉乃うへ我思お我にゆ給ふもすへていまひとゝひ
ゆりしき人おかりひといふ事をのくりのうめ
いきなはやこのやといふ由と見てふもいふはふと
なきハ人よみ侍きしまゐれいてゆくへきうしと思

まうき給ふにまゐられぬまゝりきこえもあしくみえなむ
たりひけりふかは給きそへ川のうき我見侍りはべる
ひはし此は行かんよりも猶我人ちいは宮ハいりしき
すとも我乃外へまいらせうるよ人やらんと思へハ
此は此事我ふふおりふましふもあれ
うきをふふうき世のなのりとしめしたいはべ
こをはつと君もうらんとのこかきそいさしは
う此敷よもいはえ乃みしきみせふそきはべらまり
られおうと給くよりをきてまふまゐぬ御中
ふまさいつ井ありきてあはを給りんしといとうの
御しいへていつみなわりんとたまゝふもおほ侍り

かくてやかんなんとおりゐひ出き京より母の御ふみ
もてきたりしをひらくに我の夢にいひしをはかなしく
見えしは、いつ鐘とゝ伝へくにさる翁などしたまふ
座りてうれ夢のはおらひさわはべるけるやたゝい由
ひとつはし七侍ふゆめに人々は母からいふうつなん
みえしはまはいわしに寺なかりしたてまつるよく侍
しまいせ妙へ人々なまたすは告ののく時ゝたち
よろきし人の流ゆう日もいでもおかうしくてやまし
けるに物せさせ給ひておほしもゆめのかゝる我によく御
ふむ思ひしにはまいわたらまかりしき我か物のうつゝの形
いとんりとりけるに物のけまちて我座ゝ侍きはりる

時もたちさはらでくいりしくいりまで待てなんそれ
ちかきさるにも法を行せさせ妙んとてそまうの物ま
なとりきさうへてもてきさわあまわと思ふ我の様を
きゝてのくいひはゝけしへはもいとう那しと思ふ
寺へ人座わたる所と返すうくいはゆかしさす
おかれとはゝましくそまく
ねりまるあひらんこと我思ひはなんらの世の
夢に心まとまそ寸鐘れりゝ〔?〕の風に法まて我こし
くはたはくしくとききてかしはへまし
鐘のをとのたゆはひゝきるに〔?〕をそへてわの世し
つきぬからう君にはべるへ人に異数まてきさは有りさき

つきてこよひはえうん寄ましといふ事ハ物の哉り
ゆひつけて金きほめれとおさしきんとしまうのひす
うれゆあもけんりしくとの語ちきうれは殿井人
よくきふつへといはすえ残く帰しときてふつ語く
物きうしめさぬゆとお座し清ゆつけなとよ語はふ
いふとさりしうはめ死也ゆとみるまゝれいなかわて
ゐなくいいはきゆのあるむと思ひ座お語ふもいと
気なわ無事りえにわりは申しさふ衣武むの
めうしていりんなとおかにりハまはれた語う
ちまてさきつは海をはゝみ語て物もいりまいに大金
語ちりくふにとそかくのかん物をおもかきは物思ふ

人死またのしぬハあくうるあることのなきいは夢も
こはしきならんかしいはうることおほしさる
まゝてゆのふもくおもしまきなんとうちなけく
なんたるきぬをかさねたりまゐしあてゝあつしたま
へるとゆめなん